

龍の行進

学生時代の三年間は学生寮でお世話になったが、この寮生活が私の人格の大部分を作り上げたと言っても過言でない。四人一部屋の共同生活は過保護に育ったわがままな私にとっては、ともすれば窮屈で先輩、同僚ともよく意見が対立し、生意気だとバツテンを付けられた時代もあったが、それも最初の半年間くらいでやがて世の中のルール、社会性、お付き合いというものの存在に気がつくや、にわかには明るく賑やかなものとなって行くのである。

ただし閉口したのは寮生活にはプライバシーが無い事と、上級生優位の法則であった。一年生は奴隷同然、二年生でやっと人間らしく振る舞えて、三年生になると神様であった。もつとも私は三年間在寮したのでついに神様にまで登りつめ快適な寮生活をエンジョイ出来た幸せ者の一人であった。

毎年秋には大学祭と併せて寮祭なるものを催すのであったが、お祭り好きの私はいつも寮祭実行委員会でハッスルしていた。三年生の時の寮祭はこのほか気合いが入り、全寮生百八人を以って長崎の蛇踊りをやろうじゃないかということになった。頭部を巨大な神輿に作り十六人で担ぐ。あとは尻尾まで八十人が一メートル間隔で胴体

を支える巨大な龍である。

張子の頭部は娯楽室の中で作り始めたがあまりに巨大なため、鼻だけ家の中に突っ込んでいただけで、庇でやっと雨露をしのいでいる状態であった。胴体の部分は木綿のさらしを大量に買い込み、青色に染めるのであったが、これには食事を作るための大なべを利用した。

少々体に悪い毒素が染粉に含まれているらしかったが文句を言う寮生は一人もいなかったし、事実その後には発病する奴もいなかった。

染め終わった布を縫うのは管理人のオバサンの仕事となった。なにせ寮の中のたった一人の女性であったのでオバサンも引き受けざるを得なかったわけである。このオバサン三日三晩ミシンを踏み続けた後、ちようど一週間ダウンした。お気の毒であったが三十年以上経った今も年賀状をくれるところを見ると、どうやら恨みには思っていないらしい。

ともかくも完成した龍は立派だった。とてつもなく巨大なものとなった。学祭のパレードの当日、寮から持ち出す時には寮生全員一升瓶のラップ飲みで活を入れ、堂々の行進とあいなつたが、市役所前であらかじめ仕込んでおいた発炎筒に着火し口から白煙を噴きながら踊り狂う勇姿に市民が拍手してくれるのを見て改めて感激をしたも

のである。学生時代最良の日となった。

しかし、この龍には悲しい後日談もある。三年後に後輩共がもう一度、蛇踊りをしようということになり、お蔵になっていた件の龍を修繕しパレードするまでは良かったのだが、例の市役所の前での景気づけに発炎筒に火をつけた途端に燃え上がり、頭

部を失った胴体だけを持ってゾロゾロと全寮生が帰らざるを得なかったそうなのである。消防署からのお目玉のオマケつきだったとか。

龍の口の木の骨組みに、直に発炎筒を紐で縛りつけたのが原因であつたそうだが、私の時は口の中で宙ぶらりんになるようにハリガネを利用していただけだ。記録など残しておかなかつたものだから悲しい結果となつてしまつた事を今もって反省している。

その後平成二年に学生寮が廃止されるまで約二十年間、蛇踊りの復活はついになかつたとも聞いている。

